

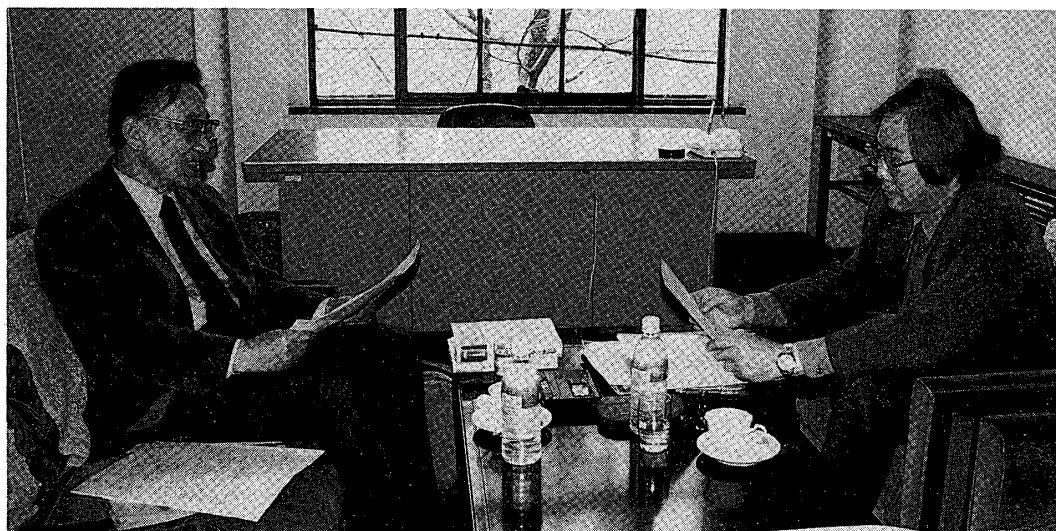
〔対 談〕

小国のアイデンティティを考える

ースコットランドを中心にー

田 中 秀 夫 (京都大学大学院経済学研究科教授)

高 橋 哲 雄 (本 学 教 授 ・ 図 書 館 長)



はじめに

高橋：田中さん、ようこそお越しくださいました。本学にはこの比較地域研究所と並んで大学院地域政策学研究科がありまして、「地域」というコンセプトがこの大学の“売り”といえますか、新しい積極的な特徴になっています。これまで2回の本誌の対談も、地域をテーマとするものでした。タイであったり、アジアであったり、あるいは地域研究の方法を中心にしたものであったわけですが、今回はそろそろ欧米が入ってきてもいいのではないかと考え、まずスコットランドを取り上げたわけです。

なぜスコットランドか、は後ほど申し上げますが、その前にゲストをご紹介しますなければなりません。

今日は、京都大学で社会思想史を担当しておられ、18世紀スコットランド啓蒙の、控えめに言っても最も精力的な研究者である田中秀夫さんにお出でいただきました。田中さんは昨年、アダム・スミスの弟子であり、スコットランド啓蒙思想の最後の大家であるジョン・ミラーについての大著『啓蒙と改革』（名古屋大学出版会、1999）を出されたばかりです。また好奇心、探求心ともに旺盛で、文献博搜で知ら

れ、話題が豊富な方なので、話が楽しみです。

1. 日本の中の大陸——対馬を訪ねて

高橋：雑談風にことを始めるのをお許しいただきたいと思うんですが、先週私は対馬に行ってきました。仕事が進まないもんですから、気分転換にと思って行ったんですが、あんまり気分転換にならなかった。というのは、対馬という国は、あえて「国」といいますが、半分韓国みたいな感じですね。国境の島で、日本本土より韓国の方が近いから当たり前といえば当たり前なんですが、道路表示、案内板の多くに韓国語が入っているのです。フェリーも毎週3便ぐらいは来ています。

町を歩いてみても、一番大きな町である厳原は石垣や石塀だらけの町でして、武家屋敷の町といってもあんなに石垣、石塀の多い町は、私は初めて見ました。これは大陸型の要塞都市じゃないかなという気がしたのです。日本で唯一外国の侵略を受けた土地だということが実感できました。

これは瀧澤さんから教えられたことですが、明治までは李朝の朝鮮も対馬の領有権を主張していたことがありました。日本と両方が領有権を主張していたわけですね。ということは、ヨーロッパに引きつけていうと、北アイルランドみたいなポジションじゃないか。南のアイルランド共和国は、共和国憲法によって全土が自分の領土だといってるわけですね。共和国の国教はカトリックです。ですから北のプロテスタントが不安を感じるのも理由がないわけではない。明治までの長い期間、対馬には北アイルランドと共通した緊張感が流れていたのではないかと思います。

ほかにも大陸的なところがあります。食べ物屋に入ろうと思ったら、それが大きな町を除いては、ほとんど無いんですね。喫茶店が無い、食堂が無い。ということは、やはり日本型じゃないんですね。韓国はどうですか。中国なんかは朝からおかゆを外食したりするわけですけど、どうなんですかね。

瀧澤：ちょっとイメージが湧きませんね。日本との差はあまり感じませんけども。さっきおっしゃった石垣ですが、これは済州島とそっくりですね。済州島は石積みますね。

高橋：私のイメージはヨーロッパとの比較から来ているのかもしれませんが、ますます余談になっちゃうけれど、日本の町の特徴として、家庭の中で果たすべき機能が、外部化されているということをよく言いますね。食堂や喫茶がそうですし、ラブホテルなんていうのは外国には極めて珍しいといわれますね。こういうところにずっと住んでいる対馬の人の、「対馬国人」といわれているような、アイデンティティというのはいかなるものであろうかなということを、つい考えてしまったりしたもんですから、あまり気分の転換にはなりませんでした。

2. 小国への熱い関心

高橋：本題に戻りまして、スコットランドの話に入ります。今日の話のテーマは、スコットランドを素材にして小国のアイデンティティを考えてみようということです。ス

コットランドは人口がたった500万。これは大ブリテン島の10分の1の人口で、面積は北海道と同じぐらい。連合王国の一部ですが、300年前までは独立国だった。そういった小国が、今非常にホットな関心を集めているということがあります。これまで自明のこととされてきた国境の見直しが世界のあちこちで進んでいるのですが、それらは一括して「マイノリティ・ナショナリズム」と呼ばれています。

それをもたらした要因の第一は帝国の解体です。特にイギリスの場合はそうですが、帝国が解体・縮小して、国民国家がいわば裸になってしまったために、これまでは帝国の傘の下にいろいろ利益の分け前に与かることもできたのが、そうはいかなくなる。とくに帝国の中での、いわばマイノリティ的、セカンド・シティズンのなところにしわ寄せが来て、差別が顕在化せざるをえなくなった。外への拡大によってこれまで露出せずにすんだ矛盾が抑え切れなくなったことが一つ。

それからもっと最近のことでいいますと、大国、超大国が解体したということですね。少なくともそういう締め付けが緩んできたこと。ソ連の場合が典型的ですね。それを構成する小さな国、あるいはネイションとまではいわなくても、エスニック・コミュニティが簇生してきた。現在世界で国の数は180ぐらいあるんじゃないかなったかと思いますが、どうでしたか。

瀧澤：国連加盟国が190ぐらいじゃないですか。

田中：200を超えているかもしれませんね。国連加盟国ということにこだわらなければですね。自分たちは独自の国民だといっているのも国と認めれば、いっそう数は増えていく。

高橋：だろうと思いますね。私の少年時代は国際連盟の認めていない「満州国」なども含めて75か国位だったかと思います。さらに今度はEUといった国家間の統合が進んでいく。それにつれて逆に分権化を進めざるを得なくなってくる。小さな地域への権限委譲を促進する作用が働く。現実にもEUでは、多言語・多文化化を推進する——地域主権を尊重し、かつ少数言語を保護する——といった方向を取らざるをえなくなっています。

その結果、スコットランドも、70年代には反ECだったんですが、現在ではイギリスの中で一番の親EUの地域になっています。それは自分たちがEUの完全メンバーシップを獲得するために権限委譲をかちとることがねらいで、最近のスコットランドの活発な動きがあるわけです。権限委譲は住民投票によって決まりました。

少し長くなりましたけれど、私が言いたかったのは、スコットランドは遠く離れたヨーロッパの外れの国ですが、世界的な小国をめぐる活発な動きの中で非常に問題関心を集めている地域なんだということなんです。

それでは、権限委譲をかちとると、スコットランドにどういう利益があるかというと、財政的にはマイナスなのです。現在英国政府から出ている助成金がなくなるおそれがある。それは、もしかしたらEUのメンバーになることで補いがつくかもしれませんが、当てにはならない。そういう不利益をあえてしてまで、なぜ独立した議会を持とうとするのか。その答はスコットランドの現在のナショナル・アイデンティティのかたちが出来上った18世紀史に遡って求めねばならないのではないかと、思っているのです。

今回、田中さんに来ていただいたのも、社会思想史の側からですが、18世紀スコットランドに通暁しておられるからです。しかしその話に入る前に田中さんがなぜスコットランド啓蒙に関心を持たれるようになったのか、その辺からうかがいたいと思います。

3. 思想史からみるスコットランド啓蒙

高橋：私のみるところ、スコットランド啓蒙というのは、社会思想史や経済思想史のテーマとしては今やグランド・テーマに属します。なぜそんなことをやるのか、とくに弁解する必要もないほどです。田中さんのこれまでに出版された4冊のご本を読んでも、なぜ自分がそういうことをやるのかという問題意識について書かれていないですね。それでこの際、ちょうどいい機会なんで、なぜ啓蒙思想やスコットランドに関心をお持ちになられたのか、お聞かせいただければと思います。

田中：そうですね。そういうふうにおっしゃるとちょっとつらい点もありましてね。私の最初の書物は『スコットランド啓蒙思想史研究』（名古屋大学出版会、1991）というタイトルの書物でして、その前書きのところで、なぜスコットランド啓蒙を扱うのかという問いだけは出しながら、その回答をしていない。様々な理由があるだろうという言い方をして、自分では回答をしなかったんですね。そのことをとらえて、書評をしてくれたある人が、問題意識がはっきりしないと、ズバリ指摘したということがありました。

高橋：ですから、なおさらこの機会に。

田中：そのことを説明しようとする、どうしても学問的なパーソナルヒストリーを語るざるをえなくなりますし、率直に語るというのはどうかというためらいがあるのですが、やっぱりそれなりの理由があって、スコットランド啓蒙に行き着いたように思います。われわれの世代は、瀧澤さんよりも若干下の世代でして、ちょうど大学生の頃に、マルクス・ルネッサンス、最後のマルクス・ルネッサンスがあったわけです。初期マルクスが非常に注目され、どんどん発掘されて、日本の研究が非常に活発になった時期なんです。

同時に、グランドリッセ（『経済学批判要綱』）が紹介されて、中期マルクスという問題設定も登場しました。初期と中期はどう違うのかを問題にする。それからまたアルチュセールの仕事もありました。認識論的切断という概念に立脚して後期の『資本論』のマルクスこそ真のマルクスなんだという。それを受けて、日本では、例えば廣松渉さんなどが、疎外論から物象化論へというふうに関心を設定しまして、マルクス主義の真の新しい地平というのは、後期マルクスの物象化論によってできただと主張する。その他平田清明さんなどを含めて実に多くの人がマルクス・ルネッサンスにコミットした。そのようなことがありまして、われわれは世代的にそういうものに当時飛びついたんです。若者というのはつねに知的刺激を求めていますからね。

宇野学派は未だ力をもっておりまして、マルクス研究が非常に活発であるということと関連して、当時の国内外の政治の文脈は多くの問題と緊張をはらんでいた

ことは改めて言うまでもありません。そういう中で、とくに、ベトナム戦争が特需を生み、日本経済の繁栄をもたらすという現実と大学の現状は無関係ではないという認識が出てくる。公害も悲惨をきわめていました。要するに当時の繁栄は根本的な不正の上に成り立っているように思われました。したがって体制と大学の腐敗を、いよいよ告発しなければならないということで、大学紛争が激しくなっていた。そういう意味で、私自身は全共闘の活動家ではなかったのですが、心情的には非常にコミットしているところがあって、思想的にはマルクスがやはり重要だというふうに思っていたわけです。

高橋：田中さんは学部学生時代に大学紛争を体験した世代なのですね。私は1969年に最初のイギリス留学から帰ってきて、こんな大変なときにのんびりしてやがってとか言われて、「懲罰人事」で学生部をやらされていました。実際はそれからがたいへんでした。どこかで顔を合わせたことがあるかもしれませんね。

田中：まあそういう意識を持ちながら大学院に入り、最初はマル経原論をやるゼミに所属したわけですが、しかしマルクスからスタートしながら、視野を広げていくプロセスで、徐々にマルクスでは具合が悪いというふうになるようになってきたわけですね。マルクス主義は乗り越え不可能な思想だとサルトルは言っていたわけですけどね。一体なぜ自分はマルクスの思想にコミットしたのかということ、やっぱり考え直さざるを得なくなってきました、そのルーツを探ることになりました。

マルクスは近代批判、ブルジョア社会の批判をやったわけですけどね、そのブルジョア社会というのはどういうものであり、そして近代の社会思想はどのようなものかをあらためて考えてみよう。内田義彦さんや、平田清明さんの言い方を使えば市民社会ですね。市民社会を原点にさかのぼって考えてみよう。そういう迂回をすることによって、マルクスが見えてくるんじゃないかと思ったわけです。ですから徐々に市民社会思想をさかのぼっていくということで、スミスやヒューム、さらにはホッブズやロックから勉強していこうと思ったわけです。

修士論文ではホッブズをやりました。ですから、そのあともホッブズで頑張ってもよかったんですけどね。といいますのは、ちょっと長くなって恐縮なんですけども、当時、私が大学院に入った頃に、ホッブズ研究は比較的盛んになりつつあって、福田歓一さんや早稲田の藤原保信さんとかですね、水田洋さんの仕事は言うまでもありませんけれども、大阪大学におられた岸畑豊さんとか、そういう人たちが次々と本を出すということがあり、それからオックスフォード大学出版会からホッブズの新しい著作集が出始めるという、まあ、これはすぐには出なかったんですけどね、そういう情報もたらされました。それと絡んで初期のホッブズのエッセイが発見されて、出版されるということがあって、それなりにホッブズ研究は活性化しつつあったわけです。

それで、修士論文はホッブズでやったんですが、結局ホッブズで本格的な仕事をするためには、新著作集を使うのが有効であろう。19世紀の半ばに出たモールズワース版の『ホッブズ著作集』というのがあるのですが、それを使っていかに頑張って研究したところで、テキストとして欠陥があるとされているものですから、成算があるか考えまして、それでしばらく置いておこうということになりました。



田中 秀夫

1949年生。京都大学大学院修了。甲南大学を経て現職。専攻 社会思想史、スコットランド啓蒙思想史。

いずれにしても、私は17、18世紀のイギリスの市民社会論を勉強しながら、マルクス主義的なものを自らどう再評価するかも考えてみようと思ってホッブズからヒューム、ミラーへ進んで行ったわけです。ですからそういうフィロソフィカルな、あるいは理論的なと言いますか、そういう関心からスコットランドに入って行ったのです。

ですから、ホッブズを少しやった後は最初はメジャーなスミスであり、ヒュームであったわけです。ところがそのヒュームやスミスでいい仕事をするというのはなかなか大変ですから、あまり無理せずに作品を書けるような対象がないかなというふうに思って、いろいろ探してみました。それで見つけたのがミラーです。ミラーの二つの著作は、非常に魅力

的なものだと思います。

それを読むということの一つの柱にしながら、しかしミラーはスミスの弟子ですから、やっぱりミラーだけをやっているということではミラーが見えてこないんですよ。ですからこの際、スコットランド啓蒙の中にミラーを位置付けるということが必要であるし、そのためには、もうちょっと幅広く、スコットランド啓蒙というのは何であったかを、思想史的に検討することはどうしても前提になるというふうになってきたわけです。

甲南に就職した時期にはすでにそういう方向に来ていたのですが、さらに甲南に10年近くいて、甲南時代に基礎的な作業ができたわけです。そういうことで始めたものですから、つまり現代の世界における地域としてのスコットランドのさまざまなアクチュアリティへの関心から入っているわけじゃないんです。ですから僕の場合は、現代のスコットランドはともかく措いておいて、18世紀のスコットランド、しかもその思想ですね。つまりスミスやヒュームやミラーやファーガスン、さらにはハチスンやケイムズといった、思想家の仕事を一度のぞいてみたいということでした。

彼らの残した著作は、すばらしいですね。それを経ることによってマルクス主義を、あるいはマルクスをもう一回考え直そうと思ってたわけですが、それはいつの間にか後景にはるか退きまして、やればやるほどスコットランドの哲学者たちは大したものだ、スミスもミラーも人間と社会、歴史について深く掘り下げていますから、非常に大したものだと思うようになった。彼らの仕事というのは、それ自体非常に魅力があるということにだんだんなってまいりまして、その魅力は簡単には説明できませんが、それで最初に『スコットランド啓蒙思想史研究』を書き、昨年よ

うやく、『啓蒙と改革』を書いてミラーにひとくぎりつけることができました。一応今の段階では、思想史的なメジャーなところは大体押さえたかなというふうに思っているんですけどね。

4. スコットランドの現実にも興味

田中：じゃあ、お前は全然スコットランドの現代のアクチュアルな問題に関心がないのかといわれますとね、それはそうでもなくて、小国として果敢に行動している現実になんかの関心をもっていると言ってよいかと思います。けれども実際にスコットランドに足を踏み入れたのは最近にすぎません。私がスコットランドに行ったのは、4年ほど前です。妻子と初めてスコットランドへ、文部省の在外研究で行ったわけですが、スコットランドはすばらしいと思いました。町もうつくしいし、魅力的な人がたくさんいるし、ハイランドやボーダー地方は言うまでもなく至る所、風景も美しいし、私はあまり酒はやりませんが、至るところにスコッチのディスティラリーというんですか、蒸留所がありですね、公園、博物館、お城からホテルや古物商まで含めて極めてすばらしいところである。もちろんイングランドも決して魅力に劣るというわけではありませんけどね。半年エディンバラに住みまして、しょっちゅう近隣を見て回りました。また、夏休みにはハイランドを中心に、セコハンの車で長距離ドライブの旅をしました。

ですから、スコットランドは大体主なところは見たという感じがあるんですけども、そういう経験を通し、自然も悪くないけれども文化的に、豊かですばらしい国であると思ったんですね。カントリーハウス一つとってみても、それが公開されていて訪問者を歓迎してくれているわけです。そこには歴史が詰っている。文化の豊かさが息づいている。もっとも経済が好調なので、ホームレスも少なく、そういう印象を持ちえたという面もあったと思います。しかし、そこに行くまで、スコットランドは実は非常に紆余曲折があったし、ジャコバイト（亡びたステュアート王朝の復辟運動）の問題にしても、そう簡単に封建反動だったということでは済まない。スコットランドの人々の心情の中には、プリンス・チャーリーと失われたジャコバイト文化へのノスタルジーがアイデンティティのよりどころとして存在している。今日のテーマでもあるスコットランドのアイデンティティを形成する一つの伝統が、ジャコバイト主義なんですね。そういうものとして存在しているということが分かりますし、そういうものが陰でありながら魅力でもある。

3年前に帰ってきたわけですが、その頃に、既にスコットランドの国民党は、勢力としてはかなり大きくなりつつありまして、スコットランド・ナショナリズムというものが、一定の力を持つ時代になってきました。デヴォリューション、分権化ということで、その後、先ほど紹介がありましたように、議会もできるわけです。しかしスコットランドの人たちは、確かに反イングリッシュ感情はありますけれども、そんなに排外主義的ではないというふうに感じました。

5. ブリテン史のなかのスコットランド

高橋：その辺、のちほど立ち入ってお話を聞きたいと思います。それからさらに、じゃあ、スコットランド啓蒙のようなmajor issueが、なぜヨーロッパの北の辺ぴな小さい国に生まれて、思想史上の大物が輩出したのかというようなこと、それがまたある時期からずっと消えて無くなってしまったのはなぜなのかというような問題についても、後でまたお聞きしたいと思います。

ところで、お前の方はなぜスコットランドなのかと訊ねられるかもしれません。私の関心はブリテン史で、新帝国主義研究から出発しました。海外投資、関税政策、その産業的基礎から政策思想の変遷——といったふうに。しかし、手短に申しますと、イギリスの近代は、その最初の植民地であるアイルランドとの関係をヌキにしては完全には知ることができないということ、英愛関係の中にブリティッシュ・アイデンティティがよく映し出されているのではないか、ということがわかってきて、アイルランド近代について私なりの絵を描いてみたわけです（『アイルランド歴史紀行』筑摩書房、1991）。

そうすると今度は、アイルランドとまた違った形のイギリスとの関係を持っているスコットランドという国に興味が出てきて、今度はスコットランドをやってみようかということになったのです。先ほど言った現代の小国をめぐる問題状況があるからスコットランドをやろうと思ったわけじゃなく、あとからそういう問題意識が生れてきました。そんなふうにブリテン研究をそれを構成する地域ごとの視角からやり直してみたい、できれば完成させたいなという気持があります。

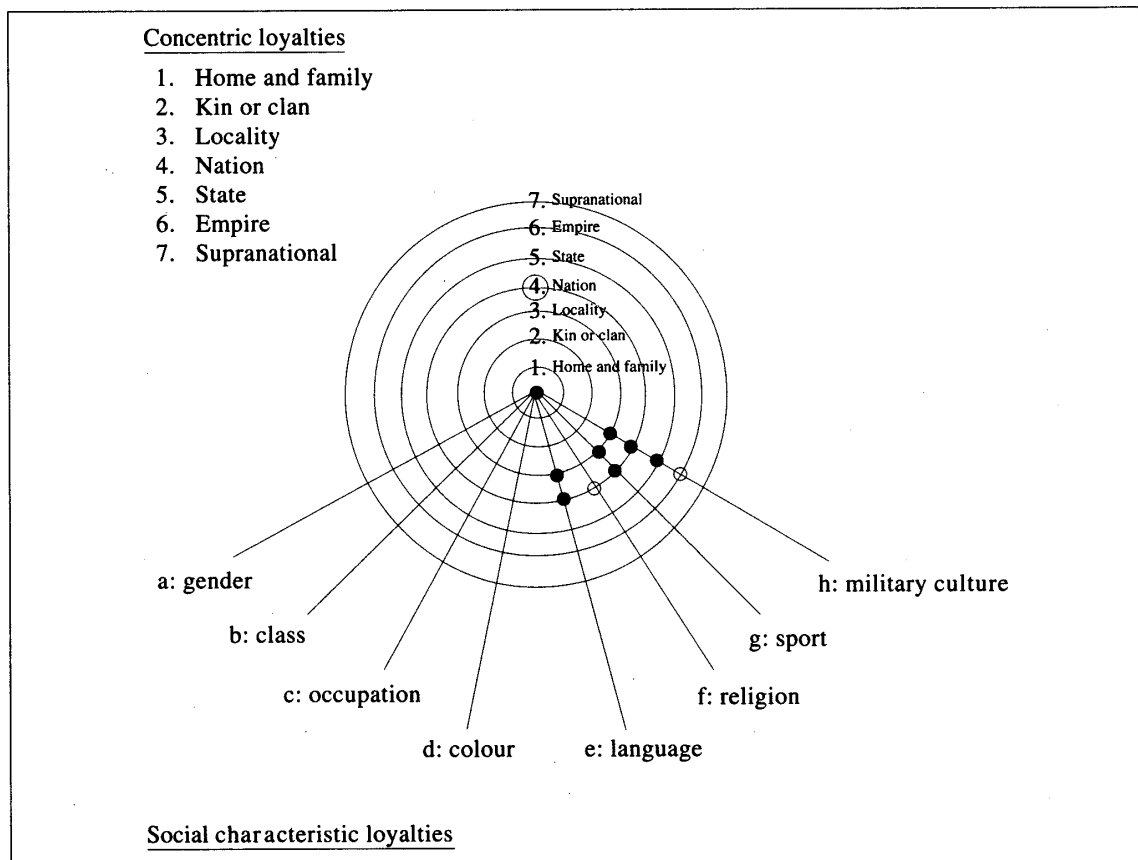
6. アイデンティティをどうとらえるか

高橋：先ほどの問題にまた帰りまして、私は「マイノリティ・ナショナリズム」ということを申しましたが、これはまた、二つの面を持っている。政治学者の間では「政治的ナショナリズム」と、「文化的ナショナリズム」という分け方をしていまして、政治的ナショナリズムというのは要するに主権要求ですね。つまりネーション、これは国民と訳されたり民族と訳されたりしますが、そのネーションがステイトを持とうとするんですね。国家あるいは政府を持とうと。国民なり民族が自分の国を、国家を持とうという要求が政治的ナショナリズム。

それに対して文化的ナショナリズムというのは、その内実に関わります。政治的な権利が欲しいというんじゃなくて、文化的な一体感を通じて民族への帰属意識、特に自分の国が誇れる文化的な何かを持ちたいという、そういう文化的ナショナリズムとの二つに分れるようです。

先ほど渡した資料（資料1）は、歴史家のT.C.スマウトさんが京都での講演のときに配られた「スコティッシュ・アイデンティティ」というペーパー中の図です。スマウトさんは実力と人気のあるすばらしい歴史家でして、このペーパーも大変読みやすかったのですが、この図と、講演の内容は、時間の関係もあってだろうと思いますが、あまりにも簡略化されていて、しかも一部適切でないところがあります。

資料1 SCOTTISH IDENTITY



それを少し整理し直してみたのが、次の資料2の1のところです。

スマウトさんは、同心円を描きまして、同心円の中心にホーム、あるいはファミリーを置いて帰属感の一番の基本に据えます。次にkinないしclan、これは自分の血縁、血族ですね。それからローカリティ、狭い意味の地域、それからネイション、ステイト、エンパイアと来て、スプラナショナルというのは、EUやソ連のような超国家機構を指します。

そういうふうにだんだんと場所的に広がりを見せているんですね、同心円は。それに対して、小文字のアルファベットで示したのは、そのアイデンティティを構成する要素です。ジェンダーとか、階級、職業。カラーというのは、皮膚の色ですね。人種。それから言語、宗教、スポーツ、それからミリタリー・カルチャーというのはですね、尚武の伝統とでもいいますか、スコットランドを説明するうえで適切な要素として採ったんだと思います。

私はこの同心円の一番真ん中に置かれているホームとかファミリーというのは、場所とか地域に関わる空間概念と考えていいんだろうかと疑問をもちました。これはむしろ集団として捉えるべきです。

帰属対象としては、地域と並んで「集団」が大切ですが、家族はそのもっともプライマリーな単位になります。次の表（資料2）では、スマウトさんの挙げたものの下に線を引いてあります。それ以外は私が付け加えた分です。例えばスクール

資料 2

スコットランドの national identity

identity のとらえかた

1 どこでとらえるか？（帰属対象）

a. 空間（地域）locality —— nation —— state —— empire —— supranational

b. 集団 family (kin), school, company, club, occupation, gender, class

c. 多元的理解の必要

nation は空間概念でもあり、集団概念でもある

2 何でとらえるか？（nation の構成要素）

a. 内部的要素 ethnicity(colour, race), language, customs & manners, military culture, ideals & ideology, royal family, religion, literature(myth), arts & music, sports, history(common memory, tradition), landscape

b. 外部契機 international backgrounds('otherness')

c. 人為的・意図的要因 'nation building' の問題——シンボルの創作・操作
'Ossian' と kilt, tartan, Scottish goods

（学校）は帰属集団としてはかなり重要だと思うんですが、スマウトさんには入っていない。しかもスコットランドの場合、教育は非常に大事ですから、これが入っていないのはまずいのじゃないかという気がします。

それからスマウトさんは職業を扱っていただけますけれども、コンパニー、これはまあ、会社と言っても、職場や地域の仲間と言ってもいいのですが、そういうものが図に入っていないし、クラブなんかも入っていない。ちょっとその辺を補ってみたいわけです。

次にネーションを何で捉えるか。つまり、ナショナル・アイデンティティは何で構成されているかという問題です。まず狭い意味でのエスニシティ、人種的なものですね。あとは言語とか、習慣風俗とか、いろいろ出てありまして、その多くはスマウトさんも触れているんですが、ここに入っていないのに思想やイデオロギーがあります。

ここに私は、例えばスコットランド啓蒙を担う知識人層の思想的、実際の運動としての力などを入れられないかと思いました。それとか、ロイヤルファミリーあるいはクラウン、特にスチュアート王家の人氣は、ナショナル・アイデンティティを考える場合ゆるがせにできないところだと思います。その点は、いま田中さんの言われたとおりです。

あとは文学とか芸術が入るはずですが、スマウトさんはスポーツだけを取り上げています。それからあと重要なのは、歴史ですね。「共通の記憶」とか「伝統」と言ってもいい。これは別個に項目を立てて取り出してもいいんじゃないかなとも思

ったんですが、とりあえずここに挙げておきました。さらにいえば風景、懐かしい故郷の風景とか民族の魂の原景なんていうのもですね、これもアイデンティティの無視できない構成要素だと思います。

その他、ここには書きませんでした、いろいろなシンボルのようなものがあるわけですね。国の花とか木、山、民族の紋章、守護聖人。それにスコットランドだったら、バグパイプだとか、タータンとか、キルトとかの民族衣装があるわけです。そういうものも考えてみなくてはいけないだろうと思いました。

7. 人種・言語・宗教

高橋：ところがですね、ちょっと話長くなりますけど、スコットランドの場合、これらはどれもそれほど大きな意味を持たないように思うんです。これがスコットランドに固有の、スコティッシュニスとか、スコティッシュ・アイデンティティとか、そういうものを構成する要素として、どれだけの意味を持ち得るかという、それほどではない。例えば人種ですね、これはよくケルト、ケルトといわれるんですが、ケルトというのは、現在のスコットランド人を、あるいは18世紀頃にまで遡ってもいいと思いますが、ケルト民族とかその末裔^{エイ}というかたちで総括することが適当であるかという、どうもそうは思えない。

田中：そうですね。それ疑問ですね。

高橋：アングロサクソンが、南東部を中心に古くから入ってきていますし、さらに追いかけてノルマンが入ってきています。ケルトといってもいくつかのエスニック・グループが別々のところから入っています。スコット、ピクト、ブリトンなど。特に南のほうの低地地方については、人種構成上ほとんど北イングランドと変わらないと言っていると思われるんですね。どうもエスニシティによって、スコットランドのアイデンティティを表現するのは適当ではないんじゃないかと思えます。

それから次に言語ですね。言語も、これも端折って言いますと、アイデンティティに関わる独自の言語という、ゲール語ということになりますが、ゲール語は今ではほとんどどこでも使われていない。北や西のほうの島——アウター・ヘブリディーズあたりでちょっと使われているぐらいです。英語の普及が早く、英語の方言としてのスコット語の使用も18世紀にはかなり肩身が狭くなっていたようです。ヒュームなども自分の言葉を完全な英語に近づけようとして、ずいぶん苦労したらしいですね。

田中：そうですね。俳優のシェリダンでしたっけ、ウィルクスとの関係も最初はそうですが、かれら呼んで、標準的な発音を学ぼうとか、またスペリングなんかも、当時はスコットランドの独特の表記がありましたけれども、それを直す。イングリッシュに近づけるということをやっていますね。またハイランドに英語そのものを普及するという運動も展開されますね。

高橋：そういうふうに英語への統合化を進めるという動きが18世紀からありまして、その結果、ほとんどがゲール語は通用していない。現在もゲール語保存へのスタンスがアイルランドとはちがっていて、実際に車で田舎を回ってみましても、アイルラン

ドには必ずゲール語と両方表示してますけれども、スコットランドではそういうことはありません。

それじゃあ、宗教はどうなのか。これはご存知の歴史家リンダ・コリーが非常に重要視している。といっても彼女は「プロテスタント国家」という括り方なんですよ。それだとイングランドとのアイデンティティの差がつかなくなります。

田中：そうですね、単にプロテスタントということではね。

高橋：イングランドの国教であるアングリカン・チャーチ（聖公会）とスコットランドのそれであるプレスビテリアン（長老派—カルヴィニズムの流れ）の差が無視されている。どちらも共通して反カトリックだということで、プロテスタント・アイデンティティとして括るわけですが、それでいいのか。彼女はそう括ることで、ブリティッシュ・アイデンティティの形成を説明しようとするわけで、確かにそれは意味が無くはない。それに、現在は確かに両者の差はかなり曖昧にはなっているわけです。例えば女王が夏の間スコットランドの離宮に来られたときは、プレスビテリアンのチャペルで礼拝をなさる。イングランドへ戻ったらアングリカンのチャペルで礼拝をするというような、そういう使い分けをされていて、それを国民も認めているわけですね。かなりそういう点でいい加減ではあるのですが。

しかしプレスビテリアンが支配していた時代にできた精神風土は、やはりスコットランドに固有のものとして、痕跡を残しているのではないか、という気はします。それは例えば教育ですね。それは大きいし、その他休日の過ごし方、仕事への態度などの習慣や生き方に表れるスコットランド人らしさの中に、反映されているような気がします。ただこれも、じゃあ、イングランド人とどう違うのかというと、私はそれほど大きな差はない、例えばイングランド人とフランス人の差と比べるとですね、それほどの違いはとてもないんじゃないか。

田中：そうですね。むしろ個人差の方が大きい。

高橋：強いて挙げれば技術・工学的センスの差は確かにあります。それから金融、お金のことが分かるということですね。貨幣制度、金融制度についてのいろいろの革新をやった、そういう点はですね、私はイングランド人に勝るという感じがするんです。美術より工芸、理論より実学といった領域に強いんですが、それとてもイングランド人も相当なものなのです。

8. スコットランド人の自己認識

田中：そうですね。程度の差ですね。しかも純粹のスコティッシュというものはそんなにいないわけだし、そもそもハイブリッドである、アイリッシュの血も入っていれば、イングリッシュの血も入っているというのが現実ですね。一例を挙げますと、私が親しくしていたエディンバラ大学のディキンソン教授の場合ですが、祖父母というのは4人いますね。そのうちの2人はアイリッシュで、1人はスコティッシュ、残る1人はイングリッシュであると言っていました。4分の1がスコティッシュで、4分の1がイングリッシュでというふうなことからアイデンティティの感じ方は単純ではないんですね。だから、「それぞれどれでもあるけれど、自分たちはむしろ

ブリティッシュなんだ」と言いますね。彼の場合はアイリッシュの血が濃いということなんですけども、人によってその程度は様々ですね。

高橋：そうなんです。これはちょっと古いんですが、1993年の意識調査があります。自分のナショナル・アイデンティティがどこにあるかについてのアンケートなんですが、それをみると、自分がブリティッシュではなくてスコティッシュだと考えている人は34%います。イングランドの場合、それは16%です。ブリティッシュであるというよりはスコティッシュだと考えているのが27%。合わせて、つまり自分が、少なくとも「どちらかといえばスコティッシュである」と考えているのが61%。それからブリティッシュであると同時にスコティッシュである、つまりどちらともいえないというのが25%。そして、いや、自分はスコティッシュではなくブリティッシュであると言っているのは10%なんです。

これがイングランド人の場合は、ブリティッシュであるというよりはイングリッシュだというのが12%、前の16%と合わせて28%というふうに、スコットランド人よりはかなりこのレベルでのナショナリズムが弱いんですね。ブリティッシュであると同時にイングリッシュであるというものが43%で、自分はブリティッシュであるというのは25%。

というわけで、全体の86%が何らかの程度か形でスコットランドへの帰属感をみずからに認め、支持していることがわかります。これはかなりの数字といわざるをえません。

田中：意識としてはそうなんです。

高橋：ウェールズではウェールズ人意識はこれほど強くありません。北アイルランドについて同じような調査があれば、相当質的にちがった結果が出てくると思います。

田中：その数字があれば興味深い。

9. 王権そしてスポーツ

高橋：そうですね。では、人種も言語も宗教も人びとの統合の絆としてはそれほど大きな役割を果たしていないのに、どうしてこれだけの帰属意識が現在生きているのか。王室の役割はどうなのかというところで、王室も1603年に、ジェームズ6世がイングランド王を兼ねることになる。Crown Unionとありますが、訳はいろいろですね。

田中：ええ、王位合同といたり、同君連合という言い方もしますが。

高橋：これで、王様がイングランドの王様を兼ねたのはいいが、宮廷がロンドンに移ってしまい、そちらの方が楽しいものだから、ほとんどスコットランドに帰って来なくなってしまうということで、政治的求心力が低下して、それまでハイランドとローランドの間に非常に大きな対立や差異があったものを、それをつなぎ止める力としての王権が弱まってきた。

ただ、それでは、完全に王権が意味を失ってしまったのかと言うと、そうではない。ステュアート王朝というのは一番長くつづいた王朝でしたが、結構人気がありまして、政権から追い出されてしまって、亡命政権になってしまってから、かえって一種の、これは何と言いましたか、折口信夫の言葉でいうと、貴種流離譚的な趣

というか、「無くてぞ人の恋しかりけり」というか、かえって亡命政権になってから人気が出てきたりします。

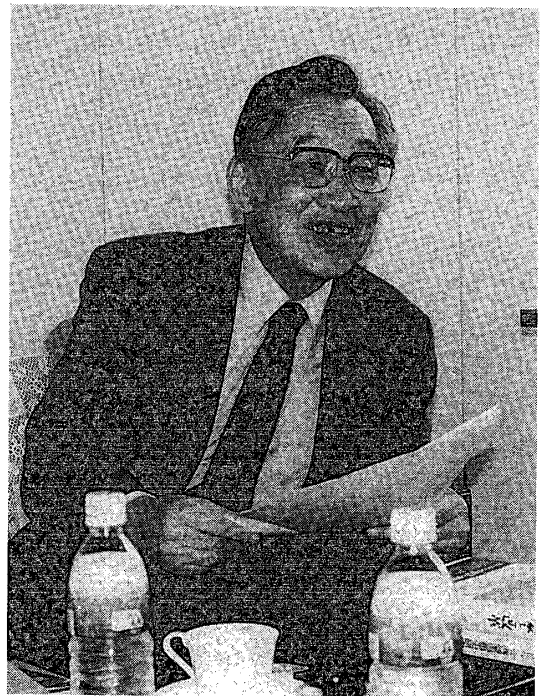
メアリー・ステュアートなども、従姉違いのイングランド女王エリザベスに処刑されてから、反イングランドの象徴の一人として今でも大変な人気がある。国民に追い出された恰好でイングランドへ逃亡した人なのですが。エディンバラの本屋では、ステュアート王朝の最後の英雄ボニー・プリンス・チャーリーとメアリー・ステュアートの本が、店頭の平積みから姿を消すことはないといわれています。

スポーツはどうでしょう。スポーツは「国の栄光」とよく言いますね。スマウトさんはこう言う。例えばスコットランドのサッカーチームがイングランドのチームと試合をして負けるとする。勝ったイングランドのチームが日本のチームと試合をする。そのときスコットランド人はどちらを応援するかというと、日本を応援する。ところが、アメリカではそういうことは考えられない。ニューカロライナのチームとテキサスのチームとが試合をして、テキサスが負け、ニューカロライナが勝ったとする。今度はニューカロライナがメキシコのチームと試合をするということになると、テキサス人は必ずニューカロライナのチームを応援する。

そういう類のことがよくいわれます。スコットランドとイングランド、ウェールズ間の試合は「インターナショナル」ゲームといわれる。そういう対抗意識の面がとかく強調されがちですが、それは私にはやっぱりちょっと強調しすぎであって、これは言ってみれば「たかがスポーツ」であって、関西人のアンチ・ジャイアンツ気分とそれほど違ったものではないような気がします。

スポーツとナショナリズムといえば、こういうことがあります。サッカーに「フーリガン」という現象がありますが、これはイングランドの名物ですね。彼らはいつも、ブリテンの旗であるユニオン・ジャックでなしにセントジョージ、これはイングランドの旗なんですね、セントジョージの旗を押し立てて海外のサッカー場や街で乱暴狼藉を働きます。意識調査ではいちばんナショナリズムが弱いはずのイングランドの方が、フーリガン行為では、いちばん極端な行動を取っているんですね。ですから、スポーツのナショナリズムはやや社会病理的というか、別の要素を考えてみる必要があるという気がします。

それから、すっかり話が長くなってしまいましたけど、歴史ですね。あるいは共通の記憶、そういうようなこと



高橋 哲雄

1931年生。京都大学大学院修了。甲南大学を経て現職。専攻 近現代イギリス経済史、比較社会文化論。

にお互いの拠りどころを求める。つまり苦楽を共にし合った間柄ですね。栄光の時代を築いた伝承とか、先祖から語り継がれた伝統というような、そういうことが人びとを結集させるかといえ、これはやはりかなりあると思いますね。

田中：そうですね、それは大きいでしょうね。

10. つくられた「共通の記憶」

高橋：それが実は、アクチュアルな私たちとしては、他者との関係とつながることが多いのです。つまり、民族の共通の記憶というのは大抵、現実にはイングランドとの関係ですね。イングランドにいじめられた記憶、イングランドと戦って時々勝ったときの記憶、負けたときの屈辱、そういったものから成り立っていて、それが熱っぽく語り継がれてきているのです。

最後に「人為的、意図的要因」を挙げました。いわゆる“ネーション・ビルディング”です。これはつまり今言った歴史、共通の記憶をあとになってねつ造してしまふことです。本当にあったことをそのまま語り伝えるのではなく、目的に合わせて、自分たちはすばらしい祖先を持ったんだ、自分たちは輝かしい歴史のもとに、選ばれた民である、といったことを強調するために、歴史の作り替えをやった。これはどこの国でも行われていることなんですが、18世紀のスコットランドでは、それが劇的な形で行われたのです。

1707年に、合邦が行われ、議会がイングランドに吸収されてしまった。「国家のない国民」になってしまったのです。これはまあ、要は経済的な理由によって国を売り渡したというような、そういう感覚がスコットランド人の間にはどうしてもありまして、そういう傷ついた民族のトラウマを医すためにも、どうしても自分たちは本当はすばらしい民族だったんだということをうたいたい。そのためにいろいろな面で歴史の書き替えをやった。

例えば「オシアン」事件というのがありました。オシアンというのは古代ケルトの英雄的戦士でありかつ詩人なんですが、そのオシアンが、古代ギリシャのホメロスに匹敵するすばらしい叙事詩を彼らのホームランドであるハイランドの僻地に残したと言い伝えがありました。当時スコットランドはハイランドとロウランドという二つの地域に分裂していて、反目対立していた。スコットランドのナショナル・アイデンティティをつくりだせるような状況ではありませんでした。とくにロウランドの人は、ハイランドの人は文明から見離された野蛮人であると見下し、ハイランド側も猛反撥していました。

そうした対立を解消するために、ハイランドにはそういうすばらしい叙事詩に代表される古い文化があったのだということを、ロウランドの知識人、ことにスコットランド啓蒙の一翼を担うそうそうたる人たちが、先頭に立って世に広めようとなりました。ハイランド出身のゲール語の分かる青年詩人に資金援助して古い詩を収集させ、それを翻訳させたのです。そうして刊行された英訳本『オシアン』は全ヨーロッパに大きな反響をもたらしましたが、ほどなくその叙事詩は、その青年——ジェイムズ・マクファースン——の創作ではないかという疑惑が生まれ、大騒ぎにな

ります。一種のやませ的な要素が、少なくともそれを収集させたエディンバラの知識人の間にはあったのではないかと取沙汰されました。

田中さん、何といましたかね、そのときのパトロン役をつとめた「穏健派文人」は？

田中：モデレーターの、スコットランド教会の穏健派で知られるヒュー・ブレアですね。

高橋：劇作家のジョン・ヒュームがマクファースン青年を発見し、あとエディンバラ大学教授になったヒュー・ブレアが引き継いでパトロン・グループの中心になったのですね。

リチャード・シャーの本に出てくる「穏健派」ですが、どういうグループですか、あれ。

11. 知識人の役割

田中：穏健派というのは、スコットランド教会の新しい動きでして、かつてのような厳しいカルヴィニズムの戒律を守って禁欲生活に徹するというのではなくて、自由主義的などと言いますか、もう時代も変わった、豊かな自由な時代が来たという現実の上でですね、それに適合した穏健な宗教にしようという考え方をとる若い世代のグループですね。穏健派宣言というようなものを、1745年ころだったと思いますが、やがて歴史家として著名になるウィリアム・ロバートスンがリーダーとなってやるわけですけども、そういうグループなんです。

ですから自由主義派というか、寛容派でしてね。彼らはやっぱり合邦体制支持なんです。合邦体制が彼らの前提でして、かつてのような独立の国に戻るということは全然考えていない。あの惨めな、貧しい、あんな時代には戻りたくない。ユニオンは、確かに民衆の多数派は反対しましたが、ユニオンをやって30年40年経った段階では、豊かになったわけですね、スコットランドは。だから富に基礎をもつ文化に、彼らは積極的な価値を求めようとして、モデレートたちはそこに活路を見出していこうと考えていくんです。

それで象徴的な出来事がいくつかあるわけですけども、一つは『エディンバラ・レビュー』という雑誌を出そうというアイデアがありましてね、これは1755年に第1号が出ている。56年に第2号が出るわけです。ところが第2号でつぶれちゃうわけです。そのようにつぶれるのですが、そういう雑誌を出すという趣旨はこういうことだったのです。スコットランドは今や大分学問や科学が発展してきた。しかしまだまだ不十分である。大陸フランスには非常に優れた『百科全書』みたいなものがあるし、イングランドも文化的には進んでいる。だからそういうものを意識しながら、とにかくスコットランドにおける文化活動としての出版物ですね、出版物をもっと広く宣伝して、いろいろな人にこんなものが出たよということをアピールしようということですね。だからスコットランド人が出した著作に関する書評誌なんですよ。そういうものとしてスタートしたんです。かれらはスコットランド協会の牧師でありながら「文芸共和国」を目指していたと言えると思います。この雑誌にはウェダバーンという政治家になる人も関係していますが、基本的には、モ

デレートがやったわけです。その周辺に例えばスミスみたいな人がいて、スミスなんかは寄稿を求められるわけですけどもね。『エディンバラ・レビュー』がスコットランドの本だけに限るのは偏狭過ぎるということを、スミスは言います。もっと外に目を向けて、フランスの本だって取り上げていいじゃないかということを、スミスは言うわけですね。

高橋：スミスはモデレートに入るわけですか。

田中：入りません。グラスゴウのハチスン、スミス、ミラーというのはですね、これは合邦支持という点では一緒ですけども、別ですね。ウィッグ体制支持という点では、もちろん両方一緒ですけどね。モデレートはエディンバラの、主として要するにスコットランド教会の牧師でありながら、同時に世俗的な啓蒙活動や、著作をものしたりするというふうな、そういうタイプの知識人ですね。もちろんハチスンとヒュームの影響は大きいものがあります。ファーガスン、ロバートスン、A.カーライル、J.ヒューム、ヒュー・ブレアが重要な5人です。ジョン・ヒュームなどは『ダグラス』という芝居を書いて上演までする。先ほど言われましたように、彼らが結構マクファースンを支援するんですね。ヒュー・ブレアが典型ですけどね。それはスコットランドのアイデンティティに深く関係しているのですね。ヒュームやスミスがどの程度マクファースンに、共感、シンパシーを持ったかというのはちょっと疑問な点がありますね。

高橋：そうですね。ヒュームは初めは募金に応じたりして、大いに興味を示すわけだけれど、途中からこれは、ひょっとしたらとんでもない食わせ物ではないかという疑いをもつようになってきますね。そしてブレアにきびしい忠告を与えたりしています。

田中：だからエディンバラの知識人といっても、多様性がある。ヒュームはエディンバラにいますけれどもね、モデレートとは違う。

高橋：違うでしょうね。第一、教会に行ったりしなかったのではないですか。

田中：そうですね。ケイムズみたいな人も、その周辺にはいるわけですけどもね。もちろんケイムズもモデレートじゃありません。エディンバラに住んでいる地主知識人で、あの時期には既に裁判官であったわけですけど、未だ下積み時代ですね。そのケイムズもやっぱりグループに入らないんですよ。つまり『エディンバラ・レビュー』の編集同人には入らないんです。

というのは一つには、ケイムズはどちらかというと自然宗教派であり、敬虔なキリスト教徒ではないと見られていたんですね。ケイムズは『道徳と自然宗教の原理』を1751年に出しています。それはやがてトマス・リードの率いるコモン・センス学派の形成に貢献することになりますが、ケイムズが自然宗教寄りであることは否定すべくもなく、物議をかもしたわけです。ですからそんな奴を仲間に入れたら、むしろ困ることになるというので、距離を置いたというのが恐らく真相だろうと思います。

しかし思想の傾向としては、やっぱり非常に近いんです。みんな啓蒙知識人というのは合邦支持ですしね、合邦がもたらした成果や既得権、経済発展を受入れるわけですから、合邦もプロテスタント王権継承も支持します。これから目指すべきは

イングランドに追いつけ追い越せであると。まあ追い越せとまでは言いませんけれども、まずイングランドに追いつくことを目指すわけですね。政治的な自由と文化的な繁栄を、経済的な富とともに、追求すべきだというふうに考えますね。

12. シヴィック・ヒューマニズム

高橋：これは田中さんの基本的なテーマなんだけれど、富と徳の分立に対して、それを両立させるという、そういう動きが同時にもう一つの流れとして、出てきますね。それはどうなんですか。その徳の方ですね。これこそ歴史家ポーコックのいうシヴィック・ヒューマニズムということになってくるのでしょうか、これはイングランドのほうではそれほど強調されていないスコットランド的な特徴なんですか。

田中：いや、そのvirtueというのはですね、それはそうではなくてイングランドにおいても非常にカントリー派、野党が強調するんです。すでに17世紀にハリントンが共和主義的徳の重要性を説くということがあります、さしあたり18世紀で考えますと、王国は平和で、富はなるほど得られたかもしれない。しかし金権腐敗政治でみんな墮落してしまったんじゃないかということで、ウォルポール体制を攻撃するという、あの時代から徳の概念、virtueの概念というのはやっぱりキーワードでしてね。ただ政権についている連中は徳の概念は嫌うわけです。政権についている側が主張するのはインタレストであり、富であり、それから、富がもたらす自由、リバティですね。

高橋：そうすると非常に乱暴な言い方をしたらですね、ポーコックのいうシヴィック・ヒューマニズムというのは、古代ギリシャの都市国家、フィレンツェに代表されるルネッサンス・イタリアの都市国家、そこで生まれ育った都市共和主義を原型にしていると思うんですね。そういう、つまり非常に「公」ということを大事にしようといういわば公民的感觉を、本来の文脈とは離れたところで野党側が、いわば政治的なキャッチフレーズとして使おうとしていた。

田中：そうですね。イングランドではそういう傾向が強いかもしれませんが、あの時代は。ただ、公共性を支える徳が自由にとっては重要なのだという思想もカントリーの思想家にはありますから、すべてがレトリックというわけでもないと思います。

高橋：それに対して、自然法的な、個人の財産権とか生存権とかそういう面を重視する流れというのは、これは与党の側がむしろそれを強調したという、そういう分け方をしてもいいわけですね。

田中：ある程度そういえるかもしれませんが、イングランドに関しては。ただスコットランドにおいては、ちょっとやっぱり違ってましてね。与党を支持する、体制派に組する人たちがヴァーチャーをいうわけです。決して野党のキーワードのような形ではなくてですね。ロバートスンにしましても、ファーガスンやスミスにしても、これはやっぱりエスタブリッシュメントですからね。まあ、そんなに地位は高くなかったとしてもですね、当時の大学教授というのはごく少数の特権階級であって、しかも大学教授になるためには、最有力者のアーガイル公がOKを出さないといけないわけです。ですからヒュームは教授になれないんです。あいつは極めて危険だと

いうので、せいぜい弁護士会図書館——今のナショナル・ライブラリーの前身——のライブラリアンにしかねない。ですからそういう意味では、政治的に保守なんです、スミスも多くのモデレートもですね。もちろん革新的な面の方が重要ですけども。

彼らはウェルスとヴァーチャーの両立は可能であるということを言うわけですね。従来のシヴィック・ヒューマニズムの伝統から言いますと、富は腐敗をもたらす。だからあまり豊かにならないほうがいい。貧しいほうがヴァーチャスであり得るんだということだったわけですね。モンテスキューだってそう言いますね。共和政体というのは豊かな人々、豊かなところには栄えないと。豊かな国にはこういう政体は不適だと言います。富と徳は両立しないというのが伝統的な共和主義的な考え方であったわけです。

それを両立させようと考えたのは彼らなんですね。ですから彼らはシヴィック的な伝統と自然法の伝統を、ある意味で総合するということになるわけです。私はそういうふうに考えているんです、総合しようとしたというふうに。ところが日本の通説はね、日本の研究者の通説はシヴィックではないと言います。ナチュラル・ジュリスプルデンスからポリティカル・エコノミーが成立したんだというふうにいるわけですね。シヴィック・ヒューマニズムの意義をみようとはしません。ポーコックなんかは一種のやっぱり総合説ですね。

高橋：そうですね、あなたのご紹介や翻訳によって、みんながポーコックを知ったわけだけど、その点が非常に私には説得的でした。そういう公民的な感覚があるんですね。ウォールポールのあの時代——渡部昇一が『腐敗の時代』で描いた、ああいう時代なんですね。それは多分、富の規模ではバブルのときの日本なんかとは比較にならないでしょうけれども、しかしそれ以上に腐敗は進行していたのですね。富や権力が現在以上に偏在し、パトロネージ（コネ）がものをいいますから、腐敗は富とは不釣り合いなまでに進行していたという違いがありますね。

それから今のお話。スコットランドはまだまだ貧しい国だから、富と徳が両立することができた、というのも面白くうかがいました。ただ、貧しさだけではなく、宗教や教育の影響が強かったとはいえないでしょうか

田中：もちろんそうですね。宗教と教育の伝統は無視できない。しかし、スコットランド啓蒙はパトロネージに支えられた面ももちろんあるわけです。有力者が比較的の開明的であったから、スミスは大学教授になれた。ミラーは直接に誰かの恩顧を受けたということはなかったようですが。モデレーターのジョン・ヒュームなんかは、ビュート卿の子息の家庭教師になりますね。ビュート卿は後で首相になります。ビュート卿というのは、西部島嶼部のビュート島の地主ですね。

高橋：大地主ですね。すごい館ですよ、島の館は。そのうえ全島のすべての住居・建造物のデザインや配置まで意のままにしている。実にピクチャレスクです。

田中：彼が、首相になったときに、まさにパトロネージでもって、スコットランド出身の知識人を取り巻きにするわけですね。それもまたコラプション、腐敗だと言えるかもしれませんけどね。

高橋：だから立場が入れ替われば違う、相手方の行動原理を今度はこちらが使うというよ

うな、そういう側面があったでしょうね。

13. 「シヴィック・ナショナリズム」は可能か？

高橋：ところでcivicといえ、政治学者の間では、ナショナリズムの新しい一つの形としてですね、“シヴィック・ナショナリズム”という用語が使われるようになっていく。これはエスニック・ナショナリズムに対する言い方です。そのシヴィックという使い方に、ちょっと私興味があるんですね。これはアントニー・スミスという政治学者の造語です。

田中：翻訳が最近出ましたね。

高橋：彼が作り出した言葉なんだそうですね。それを一条都子さんという政治学者、LSAにいる女性の研究者がシヴィック・ナショナリズムを、スコットランドに引きつけて彼女流に読み直しているんですが、それによると、シヴィック・ナショナリズムの属性として、次のようないくつかのキーワードを使っています。まず平等主義。これはカルヴァン派の教会体制に由来します。それから実学性あるいは実用性。彼女は「実証主義」という言葉を使っていますが、実学性あるいは実用性と言ってもいい。それから教育への敬意、さらには集団思考。これは、公共性と言い換えていいだろうと思います。そういう言葉を使っていて、そういういわば徳を備え、そういう価値観を持ったナショナリズムは、単に自己の人種的・言語的な要素だけで結びついているような、血縁集団的なナショナリズムとは区別されるべきである。そうした理想や目標を抱えた（高くかかげはしないにせよ）ナショナリズムもあってよいのではないか、スコットランドのナショナリズムはまさにそういうものであったと言っているのが、これなどどこかでポーコックなんかと結びつくのではないかなと思って、非常に面白く感じたんです。

田中：そうかもしれませんね。

高橋：そういう感じがされますか。話の組み立てから見て。

田中：いわんとすることはよくわかる気がします。しかしちょっと難しい問題もあるように感じます。ひとつはシヴィック・ナショナリズムという概念自体の問題がありますね。そして次にその概念を維持するとして、果たしてスコットランド啓蒙がシヴィック・ナショナリズムの思想をベーシックに持っていたと言っているかどうかというのは、ちょっと疑問にも思うんですね。

内容の説明は全く当たっていると思いますけどね。シヴィックな要素を持ったナショナリズムをあまり強調しすぎると、彼らは啓蒙知識人ですから、ネイションとかステイトは認めますけど、それを超えた連帯みたいなものも彼らは視野に入れていますしね。だからシヴィック・ナショナリズムのナショナリズムをどれくらい強調するかが問題ですね。

高橋：ナショナリズムと言えるかどうかということ。もうちょっとコスモポリタンの要素も出てくると。

田中：ええ、そういう要素を持っていますからね。だからまさに先ほど高橋さんが指摘されたようにいろいろなレベルのアイデンティティの枠組みがあるわけであって、排

他的にシヴィック・ナショナリズムというふうな枠組みで、啓蒙知識人が社会の問題、アイデンティティの問題を考えたとは言えないと思います。

高橋：普遍的な理想をかかげて新社会の建設に取りかかった民族でも、それが国づくりの段階では、取り巻く国との関係などから強烈なナショナリズムのかたちをとることがありますね。アメリカ建国やフランス革命などもそうでした。まことに逆説的な現象なのですが。

田中：確かにそうですね。それでもそのナショナリズムとシヴィック・ヒューマニズムを結びつけることには、私は抵抗を感じるのですけれどもね。ナショナリズムというよりむしろペイトリオティズムと言ったほうがよいかもしれませんね。最近スピノザについて、柴田寿子という人が本を出しましてつい数日前に買ったのですが、彼女もまたシヴィック・ヒューマニズムを使うわけです。けれども、シヴィック・ヒューマニズムは帝国主義的だというようなことを言うんですね。それは、極めて短絡的な捉え方でしてね、恐らくマキャヴェリを念頭に置きながら、マキャヴェリはシヴィック・ヒューマニストとして祖国のフィレンツェが、帝国主義的に膨張していった、イタリア全体を支配し、秩序と安定を回復するという思想を展開したという理解があるのだと思うんですけれどもね。けれどもシヴィック・パラダイムと言いますか、シヴィック・ヒューマニズムというのは帝国主義ではないと僕は思うんですね。むしろ帝国主義的な支配を受けない、専制支配を受けないためにですね、それぞれが自分の責任において公共性に関わっていく思想だと。だから、そういう意味では防衛的なんですね。

高橋：そうそう。そこのところが、そのいわば防衛的なナショナリズムというようなものが、私は当然あると思うんですね。そういう点からいうと、スコットランドというのはですね、1320年の独立宣言に当たるアープローズ宣言を見ると、栄光よりも富よりも、名誉よりも自由を、というようなことを、すでに言ってますね。王様がイギリスとくっついて、われわれの自由を守るという義務を放棄するようなことがあれば、いつでも排除するというようなことを、貴族たちがいっているんですね。非常にディフェンシブ、防衛的なんですね。スチュアート王朝が断絶したのも、専制君主制の体質が一つの伝統としてあって、それへの国民的反撥・不安がそうさせたという見方もできます。人気の高い王朝だったのですが。

そういう伝統からシヴィック・ナショナリズムということをしてですね。そういうふうにアントニー・スミスが考えているかどうかは別として、そういうふうにするならば、このシヴィック・ナショナリズムという言葉は有効な、結構面白い作業仮説たりえるのでは、という感じがするんです。

14. 小さい国からなぜ大きな思想が

高橋：次にお尋ねしたいのは、これはこれまでの話とどうつながるかは分からないけれど、やはり最初には、どうしてスコットランドという小さな国で、これだけのスケールの思想運動が生まれたのかということですね。それを一つお聞きしたいのと、もう一つは、スコットランド啓蒙がですね、いかに「スコティッシュニス」というんで

すか、スコットランドらしさ、スコットランドのアイデンティティを生み出すのに寄与したのかという、その二つの点を、どうしても今日はお聞きしたいと思っています。

田中：最初のほうは実は非常に難問でして、これはスコットランド啓蒙の研究者はみんな一度はなぜだろうかということを考えるというふうな問題ですけども、結局のところ、これだという答えは多分無いだろうと思うんですね。ただ、当時の背景からアプローチしていったら、ある程度の見通しはできるのかなとは思いますが。一つはやっぱりスコットランドの学問的伝統ですね。

つまりスコットランドというのは、人文学に限りますと、大陸の法学を非常に早くから吸収しているわけですね。法律、法体系そのものも、独自のスコットランド法ですけども、それは大陸のローマ法をかなり継受したものです。もちろんそれ以前にさかのぼりますと、スコラ哲学の伝統も実は濃厚にあったんですけどね。私がやっているのは18世紀ですから、18世紀でいうと、一つは大陸との関係で、自然法的伝統というものが非常に強固にある。

高橋：そこでお話に割り込ませていただきたいんですが、イギリス流のコモンロー、古来の法とかいわれている慣習法ですね、それとローマ法とは——ローマ法というのは非常に規範的な法だというふうにいいますが——具体的にどう違うのかということですね。大事なことなのにスコットランド法の専門家のペーパーを読んでもよく分らない。

田中：つまり端的に言いますと、イングランド法というのは判例法なわけでしょう。判例法というのは、つまり裁判官が書いた判決ですよ。これが集積されていくわけですよ。それにも確かにある種の、トマス・クック、コークというふうにかつて言っていましたが、クックなんかには言わせると、自然理性あるいは自然的正義というふうなものが実は貫かれているんだ、その自然理性というふうなものは、ローマ法にも共通なものだということであって、このように全く無関係とは見ないという見方もありますけどね。

しかし、常識的に考えますと、慣習法というものはケース・バイ・ケースで、法曹が書いた判決文でもって構成されているものであるということになりますね。確かにノルマン・コンクエストのときにですね、ウィリアム征服王が定めた法というものがあるようですね。王国に共通な法、コモンローというのは語源的にはそれに由来しますね。それからその後のマグナカルタとか森林憲章というふうな王と貴族の合意を文章化した制定法もあるんですね。確かにそういうふうな、ある意味で非常に政治的な色彩の強い王国の法の枠組みは慣習法ではなくて、いわば合意に基づきつつ上から定めたものとして存在するんだと思うんですね。

ですけど、個々の、要するにいろいろな事件を、結局中世からイギリスは裁判所でもって裁いてきたわけであって、新しい経験がどんどん出てくるわけでしょう。その都度やっぱり従来の慣例みたいなものを基礎に、新しい訴訟に対応するしかなかったということであって、ですから一見すると極めて合理性のない、混沌とした判例の集積であるということが、例えば18世紀の終わりになりますと、ベンサムなんかイギリス法を攻撃する一つの理由にもなるわけですね。

しかもよく知られていますように、イングランドの場合は、国王裁判所に属する多数の裁判所があり、地方裁判所、領主裁判所、教会裁判所等いろいろありますね。裁判所は極めて多数ありまして、それぞれの裁判所自体がギルドなんですね。ギルドですから、自分たちの収入を得なければならない。だからできるだけいろいろな訴訟を扱おうとするという競争があって、極めて混沌とした状態が続きますね。特に16世紀、17世紀は競争が激しくて、多くの裁判所がつぶれ、整理されていったようですね。しかし体系化はされませんね。

高橋：19世紀になっても、ディッケンズの『荒涼館』などをみると、法律家ギルドを肥やすための余計な訴訟の集積ぶりがよく分ります。

田中：それに対してスコットランドは17世紀に体系化するんです。ロード・ステアという人が出てきまして、体系化に着手され、比較的体系的な法体系を持つようになるわけです。ステアとロソッホのマッケンジーという人がいまして、こういった人たちのところで体系的なインスティテュートを作るということが行われます。マッケンジーというのは、実はスコットランドの弁護士会図書館を作った人間なんですよ。そこへ万巻の書を集めるわけですね。ヒュームは後にそこで勉強します。それが今日のスコットランドのナショナル・ライブラリーになったわけです。国会図書館ですね。

高橋：私がスコットランド法とそれからイングランド法との違いで知りたいのは、もっと感覚的なことで、例えばイングランド法の系統では、刑事裁判の判決は陪審員の全員一致だということです。ですから映画『12人の怒れる男たち』みたいに、延々といつまでも議論をやる。最初無罪説は1人だったのが、最後には全員を説得してしまつて、逆転無罪になるという、そういうことがあるわけですね。とにかく英米はそうなんです。ところがスコットランド法はですね、これは多数決で可決する。スコットランドの陪審は15人だそうです。その8人で可決するのです。

田中：そうですね。

高橋：そういう違いはどういうところから出てくるのでしょうか。

田中：フィフティーンという数と、それから多数決と。

高橋：まあ、陪審員の数はどうでもいいんですけどね、なぜスコットランドの場合多数決で可決、イングランドの場合は全員一致ということになったのか。それは法のどういう体質差からそうであるのかといったことを私は知りたいんです。日本のスコットランド法の専門家の書かれたものを読んでもそういうことはわからない。

それに関連してもう一つ。E.H.ノーマンの『クリオの顔』をたまたま読み返していたら出てくるんですが、ローマ法の場合は、国王の意思は法の力を持つ、つまり王の意思即法だと。ところがイギリスのコモンローの場合は、法のほうが王に優先する、王様といえど法律に従わなくちゃいかんということですね。スコットランドでもそのローマ法と同じように、王即法であるというふうにノーマンは言っているんですがですね。この違いの由来もよく分らない。

田中：第一の点についてはエディンバラのロー・スクールのジョン・ケアンズに問い合しましょう。第二の点についていうと、議会の関連での王の力はスコットランドの方が強いので、ノーマンの言い方になるのかもしれませんがね。立法権をめぐるのは、

イングランドでもスコットランドでも王と議会が優先権、優越権をめぐって争って
ますね。ノーマンの言う違いがあるとしても、おそらく程度の違いじゃないかなと
思われます。ローマ法というのは、昔ホップズを勉強したときにちょっと勉強した
記憶でいいますとね、ローマ人の慣習の集成で、市民法＝私法が中心をなすので
すが、その集成の中に確におっしゃるような大権法というふうなものがありまして、
それは国王大権、王の大権として王は法を制定する権限を持っているんですね。そ
れはしかしある意味で授権に基づいている。オーソライゼーションに基づいている、
市民の側からのですね。というふうなことからして、ですからそのオーソライゼイ
ション無しに、王が超越的に法制定の権限があるというふうには、ローマ人も考え
ていなかったといわれていた記憶がちょっとありますけどね。ご質問にお答えできな
くて申しわけないと思いますが、このあたりのことは難しいですね。

15. スコットランドの学問的伝統

田中：先ほどの話に戻ってよろしいですか。なぜこれほど優れた思想家が輩出したかとい
う一つの理由ですね。自然法というものはですね、体系的に議論を展開するという
法理論の作り方をするわけですね。ハチスンにしても、彼の死後に息子が出版した
『道徳哲学の体系』という本があるのですが、これが2冊本で、非常に体系的なも
のでしてね。これなんかは典型だと思うんですよ。道徳哲学の中に政治の議論も経
済の議論もあるわけです。それが体系的に人間の自由から始まりまして、国際法ま
で説くというふうな形になっているんですね。

そういう体系的な道徳哲学が、少なくとも18世紀には共通の学問的伝統になっ
ている。体系という学問的なスケールを重視するという姿勢がある。それが一つ。し
たがってまたそういうふうなトレーニングをしていったんだと思うんですね。いか
に優れた知性であっても、その知性がどういう形の構築物、作品を作るかによって
結果は違いますよね。つまりエッセイは所詮エッセイですね。いかにエスプリがあ
っても、エッセイを書いていたんでは、学問にはならないわけであって、それが一
つだというふうに思いますね。

それからそういうものを支える精神史的伝統といいますかね、カルヴィニズムの
あの勤勉さみたいな、インダストリアスだという特徴がやっぱりある。そしてスコ
ットランドは貧しい国であって、イングランドやフランスのような洗練された豊か
な国になりたいというアンビションがあるわけですね。豊かになりたいという思い
が強烈にありますね。スミスなんかでもそうですし、ヒュームでもそうです。だか
らそういう意欲と実際その意欲を実現する実践的な力としての勤勉さですね、それ
と大陸の自然法を継受している体系的な思考の様式、こういうようなものが結びつ
いて、したがって体系的な社会哲学といいますか、道徳哲学の本を書くということ
につながっていく。

歴史も極めて体系的で大部なんです。それもシヴィル・ヒストリーです。王様の
列伝ではなくて、人々はどのように生きてきたかということですね。もちろんポリ
ティカルなものも扱いますけどね。文明社会史ですね。その場合には大きな影響を

与えたのはプーフENDORFとか、グロチウスといった大陸の自然法学者の著作であるといわれますね。そういうモデルを参考にしながら、彼らは18世紀の中葉の経験的な現実に立脚して文明史を書いた。その場合歴史発展の4段階論が駆使されている。4段階論の形成史はミークが有名な『社会科学と下等な未開人』の中で、詳細に調べたんですけどね。社会には生活様式の未開から文明への発展というものがあり、それは主たる生活手段でいうと、採取狩猟から始まって遊牧、そして農業、農耕、その次にコマースという時代が来るという捉え方をスミスやその同時代人は共有するわけです。

彼らの学問が社会の学問になる上でこの4段階論は大きな武器になったといわれます。

ミークは、1750年頃に、アダム・スミスとフランスのテュルゴが、ほぼ同時にこの4段階論にたどり着いたのではないかと考えています。あの時代にはグローバルないろいろなこと、多様な民族や文明の存在が知られてまして、アジアの文明というのは相当発展した文明である、しかもずいぶん昔に衰えた文明だというふうなことだって知っているわけで、いろいろな旅行記だとかそういうもので、結構知識は集積されているわけですね。

それをどう整理するか、どう統合して一つの社会理論を作るかというときに、スコットランドの自然法的な伝統、体系的な、しかし同時に比較的な視点がうまく作用して、4段階論、生活様式の4段階論が成立した。そのアイデアがないと、スミスは『国富論』を書けなかっただろうというわけです。未開と文明の対比、しかも単純な対比ではなくて、生活様式が違う。しかも4段階ぐらいに分けて考えることができる。

そうなりますと、国家はいつどの段階で成立するんだろうということが問題になってくるわけです。ホッブズなんかでしたら、そういう歴史的視点はありませんから、自然状態で不都合を取り除くために人々が契約を結んで権力を設けたのが国家だという話になりますけどね。スミスになりますと、最初の未開段階は人々が貧しいし、みんな原始的なミゼラブルな平等な状態だから、別に国家なんか必要ないとなります。

家畜を持つと、家畜は富をもたらす、莫大な富になり得る。しかし怠け者は同時に貧しくなっていくだろうということで、貧富の差というものからですね、どうしても富者の富を守る必要が出てくるということで、国家が必要になってきたんではないか。あるいはもっと一般的にいうと犯罪ですね。富の偏在が犯罪を誘発する。侵略も含めて犯罪とか侵略から生活の安定・安全を維持するために権力機構を作るというふうな必要が出てきたんではないかと。

高橋：面白いんですが、そういう4段階的な、あるいは発展段階的な考え方は当時イングランドではどうなんですか。そういうことを考える人はいたのですか。

田中：イングランドには無かったと思いますね。つまりロックの後、社会哲学というふうなものは、せいぜいボリングブルックなんですよ。ボリングブルックにはそんなに無いと思いますね。マンデヴィルにもありませんし、タッカーやブラックストンにも無いと思います。

高橋：なぜそういうことをお尋ねしたのかというと、スコットランドにはハイランドというものがあって、未開状態を代表するものとされていた。この国には未開と文明が目に見えるサンプルとして併存していた。それが、海外へ行かなくても発展段階説を思いつかせる種子になったのではないかと思ったからです。

田中：そうですね、それも重要な要因でしょうね。スコットランド啓蒙について（経済学を生み出す）道徳哲学、それから歴史学について述べましたが、しかしそれだけでなく、もっといろいろなジャンルにおいて重要な著作が生み出されるわけですね。例えば美学なんかも出て来ますね、審美論というものです。

16. 啓蒙の担い手たち

田中：先のジョン・ヒュームみたいな人物も出てくるわけですね。それからヒュー・ブレアのレトリック、修辞学というふうなもの。それぞれがかなりレベルの高い著作なんです。その担い手で勤勉な人たちは、スコットランドでは相当数まで大学の教授になれたということが、もう一つの重要な要因ではないかと思うんですね。フランスの啓蒙知識人は、大学教授じゃないですね。ドイツはある程度までスコットランド型ですね。スコットランドは小さな国ですが、セント・アンドルーズ、エディンバラ、グラスゴウ、そしてアバディーンという4つの大学をすでにもっていた。ですから、ポストもそれなりにあったのですね。

高橋：それは非常に面白いですね。フランスの啓蒙知識人はスコットランドと違うのですね。

田中：モンテスキューのような貴族であったり、ヴォルテールのようなブルジョアであったりするわけですね。あるいは三文文士ですよ、ルソーとかディドロなんかは貧しかったわけですよ。大学の教授じゃないんですね。パリ大学の教授というのは、あの時代、18世紀では、反動的な神学者にすぎず、社会哲学みたいなものは展開できなかった。

高橋：オックスフォードやケンブリッジの教授たちと同類ですね。

田中：そうなんです。しかもオックスフォードやケンブリッジについていわれているのはですね、彼らは牧師、多くは国教会の牧師であり、まあ、牧師でない人もいたのかもしれませんが、俸給が保証されてる。ところがスコットランドの大学の場合はですね、確かに講座には何ポンドというふうな俸給はつくわけですけど、必ずしもその俸給が全てではなくて授業料なんですね。たくさんの学生を集めたら集めたほどお金が入ってくるわけです。しかもミラーなんかそうですけど、自分の家に学生を下宿させ、下宿代を取るわけですね。そういうふうな、ニーズに対して払ってもらうということでもあったわけですけどね。大学教授は、一応特権階級ですけど、特権と言ってもそう大したことはない。

高橋：スミスも学期途中で大学を辞めたとき、もらった授業料を返しています。学生は十分その価値があったからといって断ったのですが。いかにもスコットランドの大学という感じがします。今の時代、何か考えさせられますね。

田中：そうですね。ヒュームが教授になっていたら、たくさん仕事をしたんでしょうね。

教授は、そんなに法外な給料をもらっていたわけでもありませんで、それなりに勤勉に働く必要があったし、学生に熱心に教える必要があった。また当時の大学に来る学生は、合邦体制の下で、大学を出たらイングランド、ロンドンに行って、活躍するわけですね。そういう立身、独立して活躍をしたいというアンビションを持った青年が大学へ来ているわけですよ。学生はスコットランドだけでなく、アイルランドからもイングランドからも来る。ですから彼らにいろいろな知識を授けないといけないというので、ミラーは法学の教授ですけど、スコットランド法だけではなくて、ローマ法、イングランド法も教えるんです。そして統治論まで教える。いろいろな種類の講義をやるということで、先生の方も努力した。

まあ、ニーズがあったわけです。学生も熱心に学業に励みし、先生も教える必要があった。そしてさらに、講義の成果を書物にしてそれを出版するということが可能になってきたんですね。グラズゴウ大学にもファウルズ兄弟という出版業者がいますし、エディンバラでも出版できる。ロンドンには、アンドルー・ミラーとかウィリアム・ストラハンというスコットランド出身の出版人がいるわけです。それからもうちょっと後になりますとジョン・マリーというのが出てくるんですよ。スコットランドの出身の出版人は勤勉で、意欲的に良い本を出そうとするんです。かれらの出す本は相当に読まれ、版を重ねた。

大学教授も、ミラーとかストラハンから本を出せば、稼げるわけです。だから中間的な身分であって、勤勉がまさに富をもたらすという身分ですね。スミスは『道徳感情論』で、中下層階級においては富への道は徳への道でもあるというふうなことを言いましたが、まさにスミス自身がそういう中間身分なんですね。大学教授が中間身分であって、教育や研究に励んで本を書くというインセンティブがあった。

もちろん大学教授や牧師は職人からみれば上流であったわけですが、スミスとワットの交流が有名なように、知識人が公衆から孤立してはいなかったのですね。

政治的にもですね、1745年のジャコバイトの反乱があって、後は安定していきます。もちろんそのハイランド処分は、非常に血生臭いものになってしまうわけで、確かに悲劇的なものではあったんですが。その悲劇の結果達成されたある程度の政治的安定と、経済発展が、重要な社会哲学を構築する余裕を与えたように思われます。

高橋：その大学教授もそうですが、法律家はどうなんですか。18世紀スコットランド社会での法律家の地位は、今日のわれわれが想像もできないほど大きかったのではないですか。

田中：法律家はもちろん特権的な支配階級ですが、比較的開かれています。ですから、比較的やはり啓蒙知識人に近いポジションにいるんですね。

高橋：サー・ウォルター・スコットなんかもそうですし、ジェイムズ・ボズウェルもそうですね。さらに下ってR.L.スティーブンスンと、こうみると皆文学者ですが、法律家の資格はもっているのですね。

田中：そうですね。スコットランドでは法律家はMan of Lettersの有力な一角を占めていますね。そしてエディンバラでは法律家が特権階級なんですよ。そもそもだから法

律家になる人というのは、大体地主が多いでしょう。マンスフィールド卿が典型ですよね。パースのスクーン・パレス、ですね。

高橋：ただあんまり大きな土地持ちではなかったんじゃないかなという気がします。

田中：マンスフィールドがですか？

高橋：いや、普通の法律家層のことですが。

田中：そうかもしれませんね。むしろジェントルマンは別に法律家にならなくてもいいわけですからね。自分の所領の経営に忙しいですからね。そうですね、だから中小地主であることが多かったんじゃないでしょうか。だけどエディンバラでは法曹というのが特権階級でしてね。

高橋：それは、そのとおりですね。エディンバラの新市街の街づくりを調べたことがあるのですが、中心になってリーダーシップを揮ったのは法律家でした。1603年の同君連合以後宮廷がロンドンに行ってしまったものですから、政治が不在で、代って〈法〉が支配したという事情があったと思います。法制度がイングランドと違っていたのも、法律家の権威を高めました。

17. 啓蒙とナショナル・アイデンティティの形成

高橋：最後に、スコットランド啓蒙の思想と実践がいかにスコティッシュ・アイデンティティを作るのに寄与したかについて、お考えを聞かせてください。

田中：そうですね、アイデンティティの問題ですね。イングランドは名馬を生み、スコットランドは人材を生むと言ったのは誰でしたか。高橋さんもどこかで使っておられましたね。やっぱりすばらしい人間が確かに作られたということはいえるでしょうね。そしてそのすばらしい人間を作るに当たっては、まさにその啓蒙知識人たちが、どうでしょうか、やっぱり寄与しているんじゃないでしょうか。スコットランド啓蒙の最大の成果は文明史と道徳哲学にあると思いますが、この道徳哲学は実践哲学ですね。人間は社会に対してどう関わるか、どう生きるか、また関わるべきか、生きるべきかを問う学問が政治学や経済学になって行った。こういう道徳哲学で教育された青年がそれぞれの仕事において優れた能力を発揮したということは偶然ではないように思います。

それからスミスの著作やヒュームの著作なんかは、まさにスコットランド啓蒙の成果として、まさにスコットランドの経験や文化を体現したものですよね。もちろんコスモポリタンでヨーロッパ啓蒙のスケールの著作であるということも言えますけど、そういう意味でやっぱりスコットランド人に見てみたら誇り得るものである。つまりドイツにカントが生まれ、ドイツ人はカントを誇れるように、スコッツはスミスやヒュームはおれたちの郷里に生まれた偉大な知識人だということは誇れると思うんですよ。

ですからヒュームやスミスの仕事を頂点としまして、あの時代のスコットランド啓蒙の産物というのは、それ自体非常にすばらしいものであるし、人間と社会の可能性について、また腐敗可能性についても複眼的で深く掘り下げた考察を展開していて、われわれに関心を持って取り組ませるぐらいの魅力があるんですね。そして

道徳哲学の伝統は、19世紀の途中までスコットランドの人文社会科学を支え続けたように思います。おそらくやがて功利主義と実証主義の影響の下にかくれてしまう。しかし今日再び復活しつつある。

高橋：今日の眼からみると、とくにそうですね。ある時期にはそれほどの評価を受けなかったかもしれませんが。ただ、同時代のスコットランド人、それに続くスコットランドの一般の人々にとってはどうだったのでしょうか。

田中：スコットランドの下層の階級の人々までがそういう意識があるかどうかは分かりませんが、恐らくかなり多くのスコットランド人がそういう意識を持っていたでしょうね。むしろ現代のスコットランド人の方が知らないようにも思います。ラナーク州のキャンバスネイサンという町で経済学者のサー・ジェイムズ・ステュアートのお墓をさがしたのですが、サー・ジェイムズはきみの先祖かと聞かれたことがありました。ヒュームやスミスはそれほどではないと思いますが。それで、まさにそのアイデンティティというふうなものは、今日の最初のお話にもありましたけど、いろいろなレベルで人々は自らのアイデンティティを感じるわけですけども、翻ってわれわれ日本人が、一体何にアイデンティティを感じているかということですね。外国に行ったらおれは日本人だということを痛烈に意識しますけどね。例えば外国の研究者が京都に来るというときに、一体彼らに何を見せればいいのかということを考えますと、ちょっと困るんですよ。神社仏閣はあります、京都にはね。僕なんかは神社仏閣に連れて行くわけですけどね。京大には何ら彼らがうらやましがするようなものは無いわけです、何一つ。こまかくみていけば、価値のあるものはもちろん多々ありますが。優れた研究者はたくさんいましたし、今もいますが、全体として何か欠けている。

というふうなことを考えますと、何が自分のアイデンティティや誇りを支えてくれるのかなあというふうに思うと、やっぱりすばらしいものがあるということだと思えますよ。すばらしいものを共有しているという、そういう経験だと思えますよね。悲惨な共通の経験や記憶もアイデンティティをもたらすでしょうが、ネガティブなものからは建設的で明るいものは生まれにくいということも言えるかもしれませんね。そういう意味でいうと、戦後日本はそういうものを作ることに成功してこなかったというふうに僕は思うんです。大学一つを取ってみてもすばらしい大学であれば、これはアイデンティティのよりどころになりますよ。ケンブリッジ大学なんかやっぱりすばらしいですからね。だからああいうものを見ると、日本にはあんな大学はないと落胆もしますね。

やっぱりああいうふうな、別にかたちは違ってもいいんですが、すばらしいものを作るということが大事なんではないかなと思っていましてね。そういう意味でいうと、スコットランドは充分に自分たちはスコッツであるというアイデンティティを、自信を持って主張できるようなものがいっぱいあると思うんですね。これはイングランドでもそうですけどね。

高橋：思想のもつ高さとは別に、思想の内容がどういう貢献をしたかという問題もあろうかと思います。実学的なものへの自信も、訪れつつある時代とうまくマッチしたように思えます。平等主義的な伝統も大事です。宗教改革やそれ以前の時代にも遡る

そうした伝統があるから、思想が比較的広く分ち持たれていたことなんかも、大事な要素でしょうね。

田中：そうですね。

高橋：ですから例えば、王様でもですね、イングランドではキング・オブ・イングランド、あるいはクイーン・オブ・イングランドなんですが、スコットランドではキングもしくはクイーン・オブ・スコッツ、つまりスコットランド民衆の王様と呼ばれています。それは多分かなり大事な要素で、しかも国が小さいからなおさらまとまりがいいし、風通しも良い。そういうことも積み重なると、馬鹿にならぬ要素になるような気がしますね。

18. 小さな大国

田中：毎年夏、エディンバラ・フェスティバルがありますね。あれなんかもすばらしい活動だと思うんですね。グレイフライアーズ・チャーチというのがありますが、あそこでフィドルの演奏会がありまして、古い形のヴァイオリンなんですけどね、それに行きました。日本人はわれわれ家族ともう一人だけで、ほとんどは土地の人なんですけどね、非常に安い入場料でそういうものに接することができるんですね。聴衆のマナーもものすごくいいですしね。そういうふうなものをしょっちゅう催してますし、やっぱり文化的豊かさというふうなものは全然違いますね。それを言うところもそうかもしれませんけどね。

高橋：ヨーロッパならどこでもそうだとは言えないでしょう。とにかく人口500万の、東京都の半分以下の小さな国なのですが、しかしこれは小さな大国と言ってよい。文化的にも歴史の豊かさにおいてもそうで、その中には私が先ほど言ったように創られた要素も多分にあるわけなんですけど、これは多分に政治的な意味で国民の誇りを回復し、イングランドに対抗しうる内容の統合を図るために創った新しい神話という面があります。しかし、それが自然と、今では国の内外で受け入れられています。

いま田中さんがおっしゃったエディンバラ・フェスティバルにしても、音楽祭、演劇祭はヨーロッパにもたくさんありますけれど、リゾートの客寄せ的なところが多く、あれほどの息を呑むような背景——自然的・歴史的な装置——のなかで実施される場所はまずない。バイロイトにしても、オールバラにしてもそうです。ヴェローナのアリーナでの「ナブッコ」上演などとなると、話は別ですが。しかも、ヴェローナにはない条件としてエディンバラは一流の地元オーケストラをもっている（籍はグラスゴウですが）。しかし、そのなかで私がいちばんすばらしいと思うのは、18世紀に造られた新市街です。これは当時の開明的地主や商人、専門職階級、とくに法律家、教授などが推進した「改良運動」の一環として計画され、造成されたこの時代のヨーロッパ屈指のみごとなモニュメントです。美しいだけでなく、住みよい。中世の街が自然と出来たのに対して、これはもしかしたら“シヴィック・ヒューマニズム”——都市共和主義——の理念をかたちにしたものかもしれない。私は田中さんのご本を読んで、そんなことを考えたりもしました。

そうしたモニュメントのほかに、もちろんスコットランド啓蒙の思想家たちをはじめとする、この国の輩出した数々の人材とその業績も、ナショナル・アイデンティティの重要な構成要素たりうることは、先ほどから力説しておられるとおりです。

最後に蛇足かと思いますが、一言。先ほど来田中さんからスコットランドの文化的豊かさを讃える話がありました。私も文化的には「小さな大国」と申しました。しかし、美も文化のうちとすれば、スコットランドは自然美を除くと、この面では必ずしも大国とはいえない。こういうと観光局に怒られるかもしれませんが、例えばカントリーハウスはイングランドのそれと比べると、質量ともにはるかに貧弱です。ブリテンのベスト10を選べば、その中に1つ入るかどうか怪しい。教会建築もそうです。とくに宗教改革以後の教会は、「遊び」を嫌うカルヴィニズムの影響の下に、美しさという点ではまったくやせたものになりました。大学も、教育・研究ではめざましい成果を挙げましたが、われわれの目を悦ばせる大学街の景観という点では、オクスブリッジの足許にも及びません。少なくとも視覚文化の面では、スコットランドはけっして豊かな国とはいえないのです。天才建築家ロバート・アダムも、主としてはイングランドで仕事をしました。アール・ヌーヴォーのマッキントッシュも小さな孤立峯でした。学術や実業などの輝かしい伝統とともに、そうしたネガティブ・アイデンティティの面についても、スコットランドのもう一つの側面として抑えておかないと、全体像をとらえそこなうことになりかねません。言わずもがなのことながら、念のため申しそえました。

今日は、専門を異にするわれわれがたまたま関心を共有するスコットランドを題材にして、現代のhot issueである小国のアイデンティティの問題を中心に、多面的に、しかしけっして断片的にではなく、ハチスンではありませんが、いくばくかの体系性を持たせようとつとめながら、話を進めてきました。このほか、小国のあり方をめぐる「小国主義」など語り残された論点もたくさんありますが、私の方は、ご著書からはうかがうことのできないお話もいくつか聞かせていただき、裨益されるところ甚だ大でした。お礼を申し上げて締め括りとします。

(以上は、2000年3月23日の午後2時30分～4時30分に、大阪商業大学比較地域研究所所長室で行われた対談の記録である。)